

A 4 7 / 1 6

# 国語教育におけるマインドマップの可能性

奥村 賀 寛 (同志社香里中学校・高等学校)

## 1. はじめに

筆者が「マインドマップ」と出会ったのは、ある研修会だった。その研修会は目標設定とその達成力向上を目的としており、マインドマップは目標設定を行うためのツールとして紹介されていた。その後、筆者自身がマインドマップについて勉強する中で、これが国語教育において有効な思考ツールとして用いられるのではないかと考えるに至り、研究の対象とした次第である。

マインドマップには「発想法」と「記憶術」という側面がある。国語教育においては、自らの意見を深めたり、作文などの発想を広げたりという「発想法」としてのマインドマップ活用が有効だと考えていた。しかし、「発想法」としてのマインドマップの有効性を比較することの難しさや考察で述べる理由によって、今回は「記憶術」としてのマインドマップの可能性にしばって調査を行った。

## 2. マインドマップとは

マインドマップは、トニー・ブザン氏が開発した思考技術である。トニー・ブザン氏はその著書『ザ・マインドマップ』の中でマインドマップの特徴を以下のように述べている。

- 1) 中心イメージを描くことにより、関心の対象を明確にする
- 2) 中心イメージから主要テーマを枝のように放射状に広げる
- 3) ブランチには関連する重要なイメージや重要な言葉をつなげる
- 4) あまり重要でないイメージや言葉も、より重要なものに付随する形で加える。ブランチは、節をつなぐ形で伸ばす

また、マインドマップを描く際のルールとして、前掲書で次のものを挙げている。

- ・中心イメージを置く
- ・全体にイメージ（絵）を使う
- ・中心イメージには3色以上の色を使う
- ・イメージ（絵）や言葉を囲む枠を立体的に描く
- ・共感覚（複数の感覚を同時に近くすること）を使う
- ・字、線、イメージの大きさに変化をつける
- ・スペースを系統立てて使う
- ・スペースを適切に使う
- ・同じブランチ、あるいは違うブランチにあるアイデアを連結させたいときは矢印を使う
- ・色を使う
- ・記号を使う
- ・1本の線にひとつのキーワードを置く
- ・言葉は全部読みやすい字で書く
- ・キーワードは線上に読みやすい字で書く
- ・言葉と下線の長さを同じにする

- ・中心イメージから大きなブランチを伸ばす
- ・線と線を連結させる
- ・中央線は他の線よりも太くする
- ・境界線でブランチの輪郭を「囲む」
- ・イメージをできるだけわかりやすく書く
- ・紙は自分の前に水平に置く
- ・字はできるだけまっすぐに書く

### 3. 調査の目的

トニー・ブザン氏は、『マインドマップ記憶術』の中で、マインドマップが記憶と想起にいかにも有効かを検証している。それは次の理由による。

- 1) 「リラックスしつつ集中した状態」になる
- 2) データを分類してかたまりにできる
- 3) 繰り返し情報を見返すことができる

今回の調査はマインドマップの「記憶」効果に焦点を当て、この有効性を実証しようとしたものである。これが実証されれば、国語科だけではなく、多くの教科に応用できると考えられる。

### 4. 調査の準備

調査対象は同志社香里中学校1年生の251人である。4月に入学してきた彼らはマインドマップを教えることから始める必要があった。そこで、ブザン教育協会に連絡し、講師を派遣していただいた。ブザン教育協会は、学校や公的教育機関に対してマインドマップの講演をボランティアで行う活動を実施している。

都合の良い日程をブザン教育協会に連絡し、協会で日程調整をしていただいた。近藤学氏と大久保香織氏を講師に招き、以下の日程で講習会を開いていただくことに決まった。1学期期末考査が終了し、終業式までの期間である。

7月13日(火)	13時から16時	1組・2組
7月14日(水)	9時から12時	3組・4組
7月14日(水)	13時から16時	5組・6組

しかし、7月14日早朝に大雨洪水警報が発令され、朝から講習会を実施できなくなってしまったため、急遽講師のお二人に連絡を取り、2学期始業式後に少し時間を短縮して、3組から6組に実施した。

講習会の内容は、以下の通りである。

- 1) マインドマップの紹介とイメージについてのワーク  
これまで天才と呼ばれてきた偉人達がどんなノートの取り方をしているのかを紹介し、脳の機能についてわかりやすく説明する。
- 2) 簡単なマインドマップの描き方講座  
言葉を絵に描くことの練習である。講師が言った言葉を絵に直す練習をした。「りんご」のような描きやすいものから「やさしさ」などの難しいものまで練習を行った。
- 3) マインドマップを描いて発想を広げるワーク(自己紹介)  
始めて描くマインドマップとして、自己紹介を行った。初めての経験に戸惑いながら、生徒達は積極的に参加していた。
- 4) 文章をマインドマップにまとめる(校祖新島襄)  
国語科での授業活用を念頭におき、講師の先生には文章をマインドマップにまとめる練習をお願いしていた。今回の調査も、この技術を前提として行った。生徒達は取り組みやすかったようで、集中して作業をしていた。

5) マインドマップで文章作成のアイデア (キーワード) 出しのワーク (小学校の先生への手紙)

国語科授業での活用ということで、思考する際のツールとしてのマインドマップの使い方も練習するように講師の先生にお願いしていた。講習会では、小学校の先生に手紙を書く設定でアイデア出しを行った。マインドマップは発想を広げるツールとして、非常に有効だと言われている。しかし、この使い方は生徒達にはかなり難度が高かった様子である。

6) 5) のマインドマップをもとにした文章化

5) で描いたマインドマップをもとに、実際に手紙を書く練習をした。手紙を書くという学習内容が未習ということもあり、5) 同様に生徒にはハードルが高かったようである。

講習会での生徒は非常に積極的で、トニー・ブザン氏が主張する「リラックスしつつ集中した状態」になって作業を行っていた。しかし、発想を広げる作業は彼らには難しく、取り組みにくいという印象を受けた。これについては後述する。

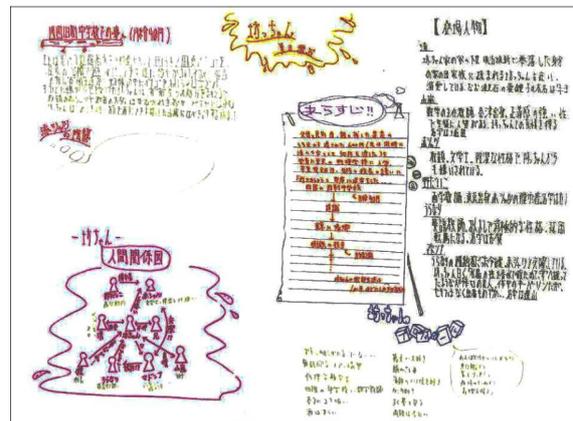
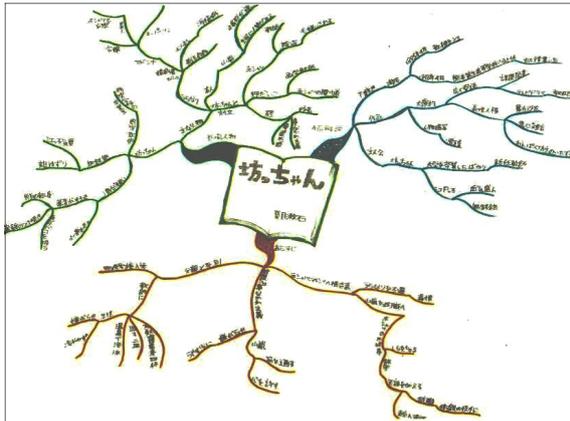
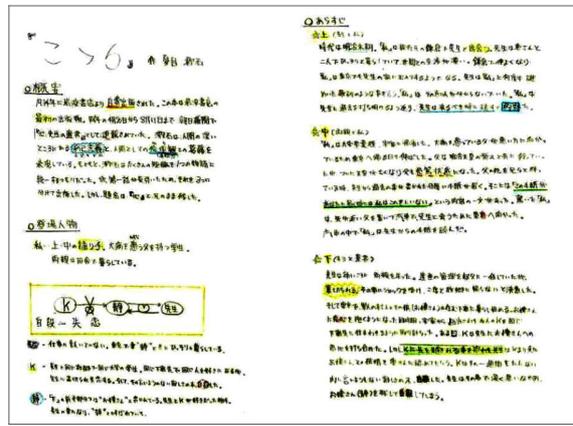
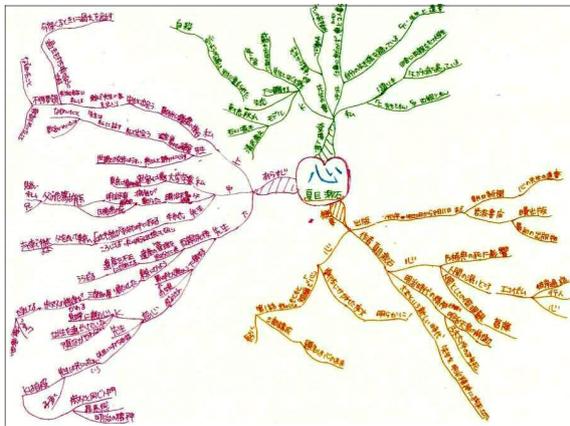
5. 調査方法

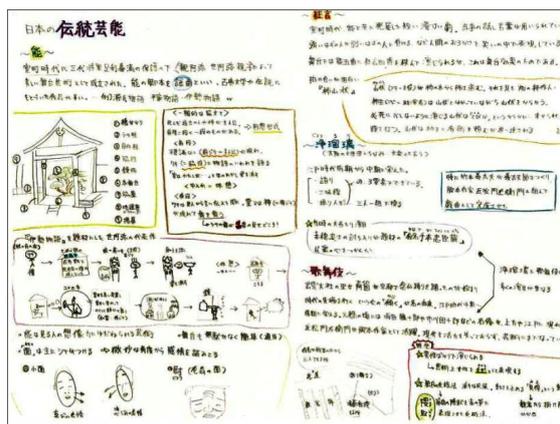
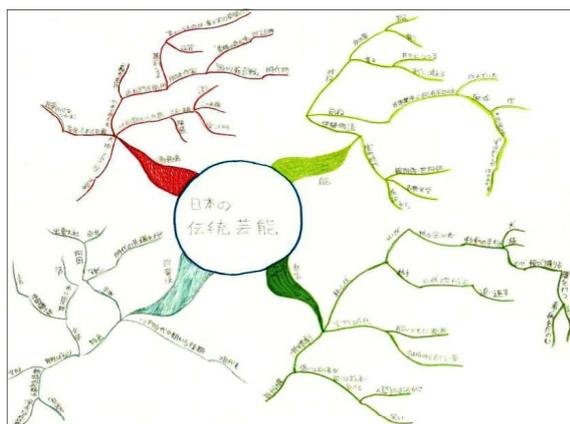
同志社香里中学校の1学年は6クラスで、中学1年生は42人のクラスが5クラス、もう1クラスは41人である。調査では1枚のプリントを3クラスはマインドマップでまとめ、3クラスは生徒が各々やりたい方法でまとめさせた。まとめる時間は双方1時間とした。次の授業時、自分がまとめた用紙を見て思い出す時間を与えた後、10問前後のテストを行った。

1回目の調査は夏目漱石の『ころ』に関するプリントをまとめさせた。1組から3組が自由にまとめ、4組から6組がマインドマップでまとめた。

2回目の調査は同じく夏目漱石の『坊っちゃん』に関するプリントをまとめさせた。1組から3組がマインドマップでまとめ、4組から6組が自由にまとめた。

3回目の調査は、「日本の古典芸能」に関するプリントをまとめさせた。この回はクラス別ではなく、彼らにマインドマップでまとめるか、それ以外の方法でまとめるかを選択させたうえで、同様の手順で行った。授業時数の関係で、3組だけは調査を行うことができなかった。





## 6. 調査結果

調査結果は以下ようになった。

	満点	マインドマップ人数	自由人数	マインドマップ平均点	自由平均点
1回目	9点	122人	126人	6.13点	6.33点
2回目	10点	124人	117人	7.56点	7.50点
3回目	10点	80人	125人	4.21点	4.04点

## 7. 考察

調査結果からはマインドマップの「記憶」効果について、他の方法と比べて明らかな優位性は認められなかった。これには以下の理由が考えられる。

- 1) 3回目の調査でマインドマップを選択した生徒が少なかったことからわかるように、彼らにとってマインドマップを道具として使いこなせる段階まで習熟していなかった
- 2) 作業に取り組む姿勢や直前に覚える暗記力で差がつき、まとめる方法では差がつかなかった

この調査以外にも1年間の授業において、さまざまな場面でマインドマップを取り入れてきた。その中で顕著なのは、本校生徒がインプットに比べてアウトプットが苦手だということである。これは講習会の時から気になっていたことである。今回の調査のようにマインドマップにまとめる作業は手を止めずに取り組めるが、意見や考えをマインドマップで広げる作業はどうしても滞りがちであった。小学校や受験対策の指導に偏りがあるためか、発達段階の問題なのか、それ以外の要因が関わっているのかは別のところで慎重に考察する必要がある。「はじめに」でも述べたように、国語教育においてはマインドマップは記憶術だけではなく、発想法として大きな可能性があると考えている。今回の調査も、本当はそれらを中心に行う予定であった。しかし、そのためには熟慮してカリキュラムを組む必要があると感じた。たとえば、意見や考えをマインドマップで広げさせる前に、「文化祭」や「宿泊行事」といったくりを与え、その行事での出来事や思い出や感じたことをマインドマップで広げて思い出させるというような取り組みである。

今回の調査では明らかな結果は出なかったが、マインドマップが学習ツールとして魅力あるものだという事は間違いない。しかし、その効果を最大限に引き出すためには、教員側の工夫が必要そうである。